徳島新聞　平成24年1月27日〈金〉

暮らし

元気のヒント

徳島大学病院神経内科
梶　龍兒（りゅうじ）

脳卒中後遺症の新治療

BOTOXで痙縮改善

寝たきりからの回復例も

脳卒中とは、高血圧症や糖尿病、動脈硬化などで脳の血管が詰まったり、破れたりすることにより、脳の一部に血流がいかなくなる病気です。脳卒中が起こると脳の神経細胞に酸素がいかなくなり、3分から10数分で細胞がつぶれてしまい、麻痺や言語障害などさまざまな後遺症を残します。

脳卒中は現在、日本人の死因の第3位ですが、私が医学生であった30数年前は1～2位を争っていました。これは、血圧管理などの予防策が広まってきたことと、いったん詰まった血管を再開通させる血栓溶解療法という治療ができてきたことが大きな要因です。

ただ、血栓溶解療法を受けるためには、発症後3時間以内に治療を始める必要があります。サッカー日本代表の元監督・オシムさんが「突然起こる麻痺や言語障害など神経の症状があれば、一刻も早く救急車を」と呼び掛けているのは、皆さんご存じだと思います。

このような進歩があって脳卒中の死因の順位は下がってきたのですが、だからといって社会的に重要でなくなったわけではありません。脳卒中は心筋梗塞の発作の6倍も多く起こりますが、いったん脳卒中になって社会復帰できる人は3分の1しかありません。現在、脳卒中の後遺症に悩む患者さんが全国には200万人以上います。

年々増えている介護保険利用者のうち、最重症で寝たきり状態である「要介護度5」の患者さんの半分以上が脳卒中を患った人で、その介護費用だけで年間2兆円以上、医療費と合わせると5兆円以上がかかっています。

お金の問題だけではありません。寝たきりで介護サービスを受けている人は、ご自身が、家族や他の周りの方の負担になっているのではないかと考えがちです。このような人が自分のことが自分でできるようになれば、本人の自尊心を回復するという意味で大変有意義なことです。

不幸にして脳卒中になってしまった場合、どうしたらよいでしょう。脳卒中のリハビリテーションはできるだけ早く始めるのがいいといわれています。いわゆる「殴りリハビリ」です。最近、発症後5～10年たっても手足が動かせるようになる画期的な治療法ができてきました。

脳卒中の後遺症がある患者の3分の2が、筋肉が固くなって動かしにくくなる「痙縮」といわれる状態で困っています。これに対して昨年、局所の筋に注射して痙縮を治療できる「ボツリヌス毒素製剤（BOTOX）」が、厚生労働省から認可されました。

ある患者さんは、2年前に起こった脳出血（くも膜下出血）が原因で左手を十分に使えませんでした（写真㊤）。しかし、2回のBOTOX注射後、以前に比べて自由に手の曲げ伸ばしができるようになり、現在は全く正常に手が使えるようになりました（写真㊦）。

徳島大学の研究では、ほぼ寝たきりに近い足の痙縮で困っている人が、何とか歩けるようになった例も見られ始めています。興味がある人はぜひ、徳島大学や近くの神経内科・リハビリテーション科の医療機関にご相談ください。

【上】2年前に起きたくも膜下出血の後遺症で、十分に動かなくなった左手【下】2回のBOTOX注射後左手が自由に使えるようになった